書作上より見た「蘭亭序」の真偽の必要性

荒　金　信　治

はじめに

一九七七年新華書店より郭沫若氏の蘭亭論辨[注1]が発行された。この著書の論議は別にして、この発刊により、それまで不動のものであった蘭亭序[注2]が論議の対象となった事は、書道研究の上において大きな功績であった。

遅まきながら、別府大学書道研究室もその訳文作業を開始してもう七年が経過する。この作業には色々な方々の助言も頂いており、郭沫若氏の意見との比較や、又、少しでも蘭亭序の学習の参考になることを願い「いつの日か正式に出版したい」と思っている。

小論はその内容の第二章・第三節「真偽の論議は書作する上でも必要となる」を取上げたもので、郭沫若氏が言う「蘭亭序は王羲之が書いたものではなく、蘭亭序の文自体王羲之が生存していた晋の時代に書かれたものではない。」に、反論するものである。すなわち「蘭亭序は隷書が破壊の一途をたどる三国から晋代に書かれたのであって、たとえ蘭亭序の揮毫者が王羲之でないとしても、その時代に生きた人によって書かれたもので無ければ蘭亭序を学ぶこと自体、無意味である」とすることにある。

第二章第三節
真偽の論議は書作する上でも必要となる

（蘭亭序を見つめる現状）

現在「書」を学ぶ人々は、この蘭亭序の諸問題の一つ「筆者および文が王羲之の手に因るものであるか、否か」については、知らないのか、又は、たとえ知っていても、その事を避けるようにして「蘭亭序を臨書する」事のみを先行させて今日に至っている。

論者は「蘭亭序の真偽について語る事と、今伝わる蘭亭序を臨書する事は無関係である」と言い、書者は「真偽とは無関係に、蘭亭序が素晴らしいので臨書する」と言う。

この両者の考えに、一時なるほどと思った事もあるが、今では両者共に納得できない立場に立っている。それは、私見として「蘭亭序の揮毫年代と臨書方法は無関係でない」と言う事と、「今存在する唐代に臨書された蘭亭序は、三五三年に書かれた王羲之の書を臨書したもの」と言う考えを持っているからである。そうでなければ蘭亭序自体を学ぶ価値観すら無くなってしまう。

（蘭亭序偽作説への対応）

郭沫若氏の蘭亭序偽作説は当時の日本に於いては大きな話題であった。しかし、大半の日本の書道研究家は、この事についての直接的な論説は避けていた。

現在、蘭亭序が高等学校の教材として扱われ、行書作品として素晴らしい物とされている限り、この郭沫若の論文に対して、いつまでも避けて通るわけには行かず、賛否いずれかの立場に立ち蘭亭序の研究を行うべきであろう。

王羲之の生卒年代ははっきりしていないが、五つ程に分けられた生卒年代が文献上存在する限り[注3]、王羲之が三国から西晋において生まれ、東晋に没したことを否定することは出来ない。

王羲之が三国から晋代にかけて生卒していると言う事は書道の歴史上重要な事柄である。隷書の書体が主であった漢の時代から、隷書が破壊され、幾多の書表現を生み、隷書・草書・行書・楷書の書体を一同に存在し融合し得た三国・晋の時代に王羲之が生卒したことを重要視しなければならない。

この時代を、のぞいて各書体を善くした人の出現、すべての書体に優れた人の存在は考えられない。そして、そこに生きた人物がこの蘭亭序を書いた事が重大なのであり、別に王羲之の名前にこだわっているわけでもない。

王羲之の名前は幾人かの集合体名詞として用いられたとしてもよいのである。

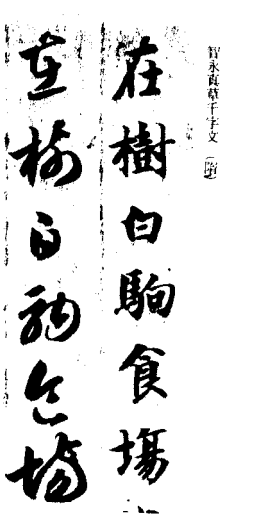
それでは真の蘭亭序の姿はどの様な形をしていたのだろうか。

真跡が存在しない限り、現存するその姿から真跡を想像しなければならないだろう。

唐代において臨書された数々の蘭亭序は、唐の時代に伝わり太宗の下に入手された一つの蘭亭序を基にて書かれたはずであるから臨書する唐人はかなりその真跡を意識したに違いない。真跡がなく臨書したもののみが残存する現状において、単に「唐人の匂いを残し過ぎている」と軽視してしまうわけにはいかない。

書作する上において、郭沫若氏の「蘭亭序の文自体、王羲之の作でない」の考え方に賛成する人や、「隋の智永が蘭亭序を書いた」とする考え方に立つ人は、今存在する蘭亭序に隋の書風、智永の書風を加えて、臨書する必要性が生じる。又、隋の智永が蘭亭序を書いたとすれば、第一柱本の線質[資料1]の品格と今存在する智永の書[資料2]の品格の質の異なり

資料1



資料2

資料3

方に戸惑いも生じる事になる。　それは、幾多の書表現を生み、隷書・草書・行書・楷書の書体が一同に存在した三国・晋時代の書の線と蔵鋒がもう殆ど破壊されてしまっている隋代の書の線とは根本的に異なっているからである。

かりに、智永の時代（隋）に書かれたものを見て臨書したと仮定する時、第一柱本に見られるような蔵鋒のいきとどいた奥の深い線を引き尚かつ品格を保たせた臨書表現が出来たであろうか。

隋の時代に書かれたものの臨書とすれば、第三柱本（資料3）ぐらいの入筆表現が精一杯のところであろう。第一柱本は、かなり蔵鋒を意識して再現に気を配り臨書しており、唐代に書かれたとは思えない程素晴らしく蔵鋒を用いて品格のある線を引いている。これを見る限り「三国から晋代の隷書が衰退し、色々な書体が噛み合っていったこの時代に書かれた蘭亭序を基に臨書した」と、しなければ第一柱本が唐代に臨書されたものではなくなってしまう。第一柱本が智永によって書かれたものか、第一柱本そのものが蘭亭序の真跡ではないかと言った、事にまで話は進んでしまう。

第一柱本は素晴らしいがやや動きに問題があり、臨書本の領域を脱してはいないので、真跡本を見て書いた臨書本に間違いないだろう。その真跡本こそ三国から晋代において書かれた蘭亭序に間違いはない。

おわりに

（真偽は書作する上でも必要となる）

真実はどうであれ、三国から晋代においての王羲之の存在は否定出来ない。

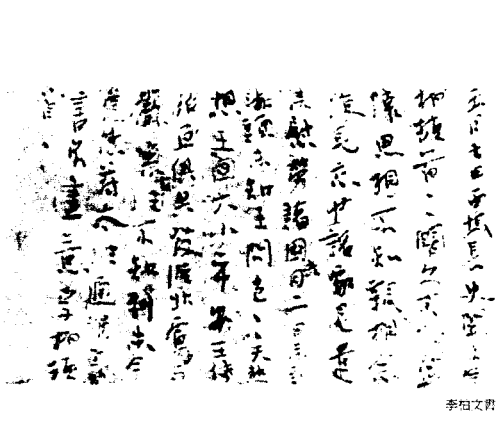
現存する唐時代に臨書された蘭亭序は、三国・晋時代に書かれた王羲之の書を見て書いたものであり、現代人はその蘭亭序を基に臨書を行っている。

その臨書態度は、形は第一柱本、流れるリズムは第三柱本の様に書表現すべきであろう。その上に、王羲之とほぼ同年代に生存した西晋時代の残紙類（李柏文書等）[資料4]などの肉筆の表現と、その時代の品格を何等かの形で今存在する蘭亭序に加えて「真の蘭亭序はどんな物だったか」の推理学習を臨書の主眼に置かなければならない。

この三国・晋時代の書風を主体にせず、隋の時代を主体に臨書すれば、第二柱本（米芾・宋以後の人）[資料5]の様な書表現となってしまうだろう。

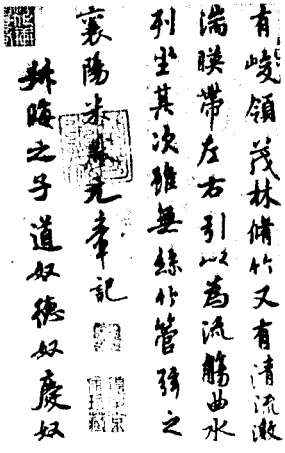
蘭亭序が、王羲之の書であるかどうかという事より、この三国・晋時代に書かれた物と言う事を重要視しなければ蘭亭序自体の学習価値そのものを失ってしまう事になる。

蘭亭序の真偽は書作する上でも必要となるのである。



李柏文書

資料 4



（米芾の書）（第二柱本）

資料 5

目　录

上　编

新疆新出土的晋人写本《三国志》残卷 …… 郭沫若（1）
由王谢墓志的出土论到兰亭序的真伪 …… 郭沫若（5）
《驳议》的商讨 …… 郭沫若（33）
《兰亭序》与老庄思想 …… 郭沫若（42）
论《兰亭序》的两封信 …… 宋白华（48）
东晋字体没有脱离隶书笔意 …… 王一明（48）
揭开《兰亭序帖》迷信的外衣 …… 龙　潜（61）
《兰亭》的迷信应该破除 …… 启　功（69）
《兰亭序》并非铁案 …… 于　硕（77）
《兰亭序》真伪的我见 …… 徐邦玉（83）
从字体上试论《兰亭序》的真伪 …… 赵万里（91）
东吴已有"蕾"字 …… 于　硕（93）
《兰亭序帖》辨妄举例 …… 李长路（94）
《兰亭》辨妄举例小补 …… 李长路（109）
从《斯翼雄兰亭图》谈到《兰亭序》 …… 史树青（115）

下　编

柳子厚之于兰亭 …… 章士钊（1）
《兰亭序》的真伪驳议 …… 高二适（4）
论东谷的书法风格并及《兰亭序》 …… 陶承祚（11）

（注 1 － 1）

插图目录

一　东晋谢鲲墓志 …… （上编 25）
二　东晋谢鲲墓志拓片 …… （上编 25）
三　东晋顾荣妇刘氏墓志拓片 …… （上编 26）
四　东晋兴之夫妇墓志拓片（正面） …… （上编 27）
五　东晋兴之夫妇墓志拓片（背面） …… （上编 28）
六　东晋刘越墓志拓片（正面） …… （上编 29）
七　东晋刘越墓志拓片（背面） …… （上编 30）
八　齐刘胤天地券拓片 …… （上编 31）
九　齐刘胤买地券箱文 …… （上编 32）
十　严可均《全上古三代秦汉三国六朝文》 …… （上编 34）
十一　镇墓兽本题上本 …… （上编 39）
十二　东晋王闽之墓志拓片（正面） …… （上编 53）
十三　东晋王闽之墓志拓片（背面） …… （上编 54）
十四　东晋夏金虎墓志拓片 …… （上编 55）
十五　南朝陈智周叔宣母黄夫人墓砖志拓片 …… （上编 56）
十六　南朝齐阳固墓冰字道整砖志拓片 …… （上编 57）
十七　东晋青瓷鸡头壶残器 …… （上编 58）
十八　东晋青瓷鸡头壶底拓片 …… （上编 58）
十九　东晋青瓷鸡头壶底拓片 …… （上编 58）
二〇　匈奴明昌镜背面拓片 …… （上编 59）
二一　北齐李清首碑 …… （上编 66）
二二　北周天和二年造像记 …… （上编 66）
二三　北齐朱岱仲碑 …… （上编 67）
二四　东魏司马昇墓志铭 …… （上编 67）
二五　西晋咸宁四年吕氏碑 …… （上编 67）
二六、北齐武平四年高僧为赛王巳纪造衣物券 …… （上编 68）
二七、南北朝时南邪县战马画像砖墓志 …… （上编 68）
二八、八大山人临《临阳序》 …… （上编 74）
二九、八大山人临《临阳序》及跋 …… （上编 75）
三〇、旧题兰亭券序 …… （上编 72）
三一、北宋文勘字迹 …… （上编 76）
三二、南宋张栻切字迹 …… （上编 76）

（注 1 － 2）

图版目录

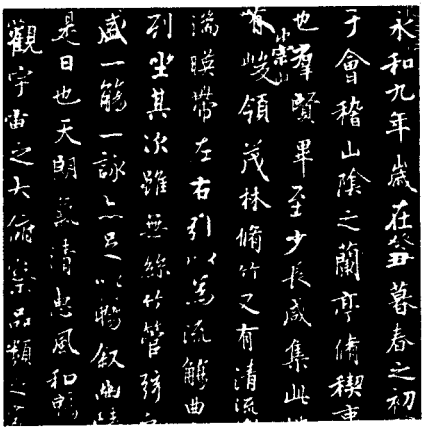
壹　唐人摹《兰亭序》（神龙本，部分）
贰　《翰宝子碑》和《翰龙颜碑》（部分）
叁　新疆新出土的晋人写本《三国志》残卷
肆　新疆新出土的晋人写本《三国志》残卷
伍　1. 东晋兴之夫妇墓志（正面）　2. 东晋兴之夫妇墓志（背面）
陆　东晋王丹虎墓砖志拓片
柒　东晋王闽之墓志（正面）
捌　东晋王闽之墓志（背面）
玖　1. 东晋后凉麟嘉五年写佛像经　2. 刘宋大明八年刘怀民墓志　3. 晋人书三国志吳志
拾　1. 西晋太康五年抄昭笑地莉　2. 西晋元康六年诸佛要集经
拾壹　1. 西晋永嘉四年文书　2. 东晋王僧之十一月十三日帖
拾贰　1. 前凉李柏文书（一横）　2. 前凉李柏文书（二横）
拾叁　1. 西晋陈机平复帖　2. 西凉建初十二年写经
拾肆　1. 西汉神爵四年简（上）　2. 西汉神爵四年简（下）　3. 东汉永元二年瓮　4. 东汉延平元年瓮墓字　5. 东汉建宁元年张角碑
拾伍　1. 东汉光和元年柏买墓地券　2. 东汉建光元年冯孺神道阙　3. 魏景元四年简　4. 东汉永和二年简　5. 魏十三字残碑
拾陆　1. 东晋王羲之表孤帖　2. 表孤帖局部（左）、礼侍中帖局部（右）
拾柒　东晋王羲之礼侍中帖
拾捌　1. 东晋王羲之延得书帖　2. 东晋王羲之四月二十三日帖

（注1－4）

插图目录
三三、南宋楼钥草字迹 …… （上编 76）
三四、东吳永宋五年"郡户买地券"（摹本） …… （上编 93）
三五、晋刻"永"、"九"、"年"字写法 …… （上编100）
三六、晋墓砖五年简 …… （上编108）
三七、晋砖阳神道残石 …… （上编108）
三八、晋王君墓子 …… （上编108）
三九、晋神爵等字残志 …… （上编108）
四〇、晋骨字残石 …… （上编108）
四一、刘宋石佛记残石 …… （上编108）
四二、后凉妙法莲花经 …… （上编104）
四三、晋正月十四日文书 …… （上编112）
四四、晋八月廿五日文书 …… （上编112）
四五、晋三月一日文书 …… （上编112）
四六、晋张趋诱文书 …… （上编113）
四七、晋代文书残片 …… （上编114）
四八、晋三月十四日文书 …… （上编114）
四九、晋九月十一日文书 …… （上编114）
五〇、传韶立本《斯翼雄兰亭图》卷 …… （上编115）
五一、《兰亭序帖》和，兰，亭，峻，茂 …… （上编119）
五二、贺本《真草千字文》和，兰，亭，峻，茂 …… （上编119）

五三、太元十口年东寿墓墓书铭记（摹本） …… （下编 26）
五四、西汉子和少公木简 …… （下编 26）
五五、东晋永和二年五门官船火行木简 …… （下编 26）
五六、东汉熹平元年朱书刑徒瓦 …… （下编 26）
五七、晋墨曹木简 …… （下编 26）
五八、晋缺下者薛明木简 …… （下编 26）
五九、魏景元四年墓下史家卢木简 …… （下编 27）
六〇、吳晋玄纸本尺牍 …… （下编 27）
六一、晋郭恩永宴集（拓本） …… （下编 27）
六二、吳墓府君碑 …… （下编 27）
六三、永和十三年墓碧墓墓砖书铭记（摹本） …… （下编 27）
六四、晋为世主纸本尺牍 …… （下编 28）
六五、晋一日纸本尺牍 …… （下编 28）

（注1－3）



（注2－1）

兰亭论辨

*

文物出版社编辑出版
北京五四大街29号
中国青年出版社印刷厂印刷
新华书店发行
1977年10月第一版第一次印刷
787×1092 1/16开 11印张 图10页
统一书号：7068·298 定价：1.10元

（注1－5）

（注2－2）

王羲之の生没について

王羲之生没年代の諸説研究（王羲之現在の有力説 307～365）

388 ― 344　王献之　王羲之第七子

（77才説）379 ― 353 ― 322 ― 303　① 姜亮夫歴代人物年里碑傳綜表
51才　42才　20才

（以下59才説）379 ― 321　② 羊欣筆陣圖→疑年録
33才　24才　2才

361 ― 303　③ 張懷瓘書斷→東觀餘論
51才　42才　20才

364 ― 306　④ 王羲之題衛夫人筆陣圖後
48才　39才　15才

365 ― 307　⑤ 魯一同右軍年譜
47才　38才　16才

269 ― 周顗

400　386　353　344　322　300　280　260

晉　317　三国

東晉　西晉

十六国　304　265

303 ― 陸機 ― 261

（西晉）　○ 木簡・残紙

○ 月儀章（筆者案靖）

二一六―三〇三頃　平復帖（筆者陸機）

李柏尺牘（龍谷大学・大宮学舎図書館蔵）

○羽田亨説　咸和三年―五年（三二八―三三〇）

○王国維説　永和元年（三四六）又はその後

○西川寧説　永和二年（三四七）

三四〇年頃　喪乱帖（王羲之）

三四〇年頃　孔侍中帖　〃

三五〇年頃　姨母帖　〃

三六〇年頃　初月十二日帖　〃

十七帖・此事帖

快雪時帖・行護帖

奉橘帖・澄清堂帖

三四八年　楽毅論（王羲之）

三五三年　蘭亭叙（〃）

三五六年　黄庭経（〃）

東方朔畫賛（〃）

中秋帖（王献之）

三九〇年頃　洛神十三行

四〇五年　爨寶子碑